国際社会学部

真島一郎

Ichiro Majima
現代世界論コース／西アフリカ
文化人類学・現代思想

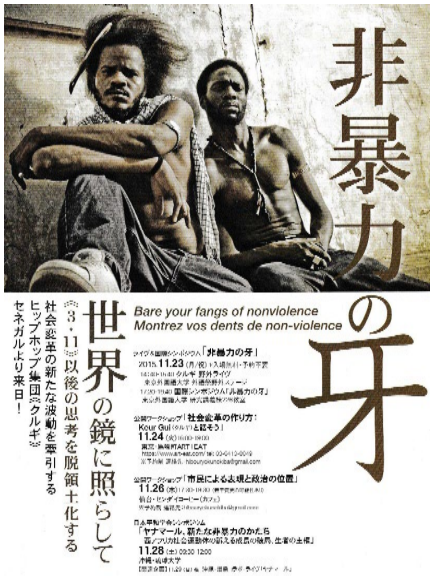
人類学と現代思想

専門は文化人類学と現代思想です。ふたつの思考が交わる場には、だれもが生身（なまみ）の人間である私たちにとっての、生と死をめぐる対話の扉が開かれています。人類学者がフィールドで出遭うのは他者というより、幾分かは世界を「共に生きる」自分自身の姿でもあるでしょう。ただし、古来の警句「メメント・モリ」に照らすなら、世界のだれかと「共に生きる」日々も、私たちがけっして「共に死ねない」現実に基礎づけられているはずです。12世紀の神学者ユーグ・ド・サン・ヴィクトールは、次の言葉を遺しました。「自分の祖国を麗しいと思う人は、まだまだ未熟な青二才である。やがてどのような国でも自分の国だと思えるようになった人は、すでに強靭な魂をもっている。しかし完璧な人間はただひとり、自分にとって世界全体が異邦と感じられるようになった人である」。

研究紹介

村落での古典的なフィールドワークの場を20世紀末の内戦がまともに貫いた経験をきっかけに、西アフリカの過去と現在を定点としながら世界性の限界をみつめてきました。それから人類学者マルセル・モースの思考や、戦後沖縄の反復帰思想、日本初期社会主義の研究などを経由したのち、希望一色に塗りかためた消費の身ぶりを迂回する道すじとして、存在の《夜》にまともに対峙するアナキズムの可能性を構想しています。

クルギ招待企画 『非暴力の牙』映画



https://www.youtube.com/watch?v=iiCMZOCJr10

TUFSCinema アフリカ

https://www.youtube.com/watch?v=fBB4AyaKWPg

担当授業

- 文化人類学入門
- 私たちのアナキズム研究
- 現代世界と人類学
- 「社会」像の変容／への抵抗に向けた想像力の研究

関連する分野

- 現代思想
- 社会人類学
- 西アフリカ民族誌学
- 社会学

出版物

現代思想
- 『文化解体の想像力』
- 『誰が世界を翻訳するのか』
- 『社会的なものの発明』（訳）

文化人類学
- 『山口昌男―人類学的思考の沃野』
- 『神話論理Ⅳ―裸の人』（訳）

西アフリカ民族誌学
- 『20世紀〈アフリカ〉の個体形成』
- 『ヤナマール―セネガルの民衆が立ち上がるとき』（訳）
- 『アラーの神にもいわれはない』（訳）

国際社会学部

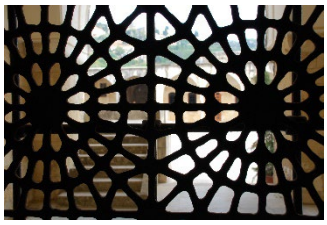
「人類学と現代世界」ゼミ

どのようなゼミか

人類学（文化／社会人類学）の基盤には、世界のいかなる土地に生き、いかなる時代に生きた人びとについても、その裡に自己の姿を透視しながら思考していく構えがあります。だれかの生を考察「対象」とせず、自分自身の「いま」との繋がりで考える意志さえあれば、ゼミの一員となるうえでテーマは問いません。むしろこのゼミは、各人の知的関心がばらばらな状態を理想とします。思いもよらないゼミ友（ぜみとも）の発想に鮮烈な刺戟をうけながら、大学後半の2年をかけて存分に思考を深めてください。

このゼミは、書物を、お勉強のためのタイクツな道具としてでなく、書き手の思考と生が刻まれた、読み手との黙せる対話の場として感受できる、あるいはこれからそのように感受していきたい方に向いています。現代世界の諸問題を、ジャーナリスティックな表層に流れることなく、問題の根幹へ、事実の細部へと向かうように考察をこころみる内容ならば、地域や主題は問いません。文献の探しかた、読解のしかた、メモの取りかた、各論のまとめかた、論文全体のプレゼンテーションと論述の展開法などを得しながら、自分の思考の里程標として、卒業論文を完成・提出することが目標になります。

自分への信頼を失うのでなく、確かなものとするための卒論です。互いに力を合わせ、ぜひ胸をはってご卒業の時を迎えてください。



卒業論文

- 嘘と真をめぐる生の揺動―ヴァーツラフ・ハヴェルの政治哲学から
- シリアを越えて踊る―あるバレエダンサーの異邦
- 《母》という争点―チリの母性主義社会政策と新自由主義
- カタリナの声 – 社会的な死をめぐる責任の所在
- マオリ土地権利抗争の507日―1977年、バスティオン・ポイントから

夜のディアローグ

- 向井孝『暴力論ノート ―非暴力直接行動とは何か』
- Ｊ・Ｍ・クッツェー『マイケル・Ｋ』
- 西谷修『夜の鼓動にふれる ―戦争論講義』
- ピエール・クラストル『グアヤキ年代記』
- エンリケ・ビラ=マタス『バートルビーと仲間たち』

（現代世界論コース　真島一郎ゼミ）

“自分は世界のどこに立っているのか”という共通の問いのもと、様々な分野に関心を持つ学生が、それぞれのテーマについて思う存分思考を深めることが出来るゼミです。研究テーマは多様ですが、各自でただ黙々と論文執筆に取り組むというわけではありません。むしろ、ゼミ友同士で研究テーマを共有し、友のテーマも自分事として一緒に考え、自身も新たな視点にであうというのが真島ゼミの大きな特徴です。毎年真島ゼミ生は、素敵なゼミ友との出会い、皆で一緒に励まし合いながら書き上げた論文に誇りを持って卒業していきます。私たちの身近に存在する“なにごとか”。そのまえで、怒り、悲しみ、混乱し、考え、考え、考える…。そんな真島ゼミでの、日々を振り返るころ、以前の自分には想像もつかなかったような地点に立っていることでしょう。（文美友）